▼CNCP からのメッセージ

# インフラパートナー制度とインフラテクコン

シビル NPO 連携プラットフォーム 協働推進部門担当
インフラメンテナンス国民会議　市民参画フォーラムリーダー
アイセイ（株）代表取締役
岩佐宏一

## 土木学会インフラパートナー

先日令和３年５月 18 日に、オンラインでインフラパートナー合同オンライン交流会が開催され、シビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）を代表して参加したことについて簡単に報告と今後の見解について想像ベースで考えたことを記述いたします。

ちなみにご存じかと思いますが、このインフラパートナーは、土木学会が JSCE2020 で掲げた５つのポイントの『JSCE の新たなパートナーの展開』と位置づけされており、インフラに関わる活動（地域づくり、人材育成等）を行う市民グループと土木学会が対等なパートナーとして、連携・協力するもので、インフラ関連の活動活性化や地域のインフラの質的向上を期待する取り組みである。

初回参加されたパートナーは、北の北海道「シーニックバイウェイ支援センター」から南は長崎の「道守養成ユニットの会」の計 16 団体で、活動で多くを占めるのは地域への技術支援、技術者の育成、地域活性化支援となっています。これらの活動の多くは、その社会活動に共感をもった企業や個人から会費を集め活動資金としているため、素晴らしい活動や仕組みづくりをしていても、全国に発信するための PR 力が弱かったり、活動の多くはボランタリーで、活動団体の横のつながりを意識し情報交換が取れるほどのマンパワーも不足しているのが現状であるため、この土木学会のインフラパートナーの取組は、情報の発信や横のつながりを意識するための情報交換の場づくりとすると有効であると思います。

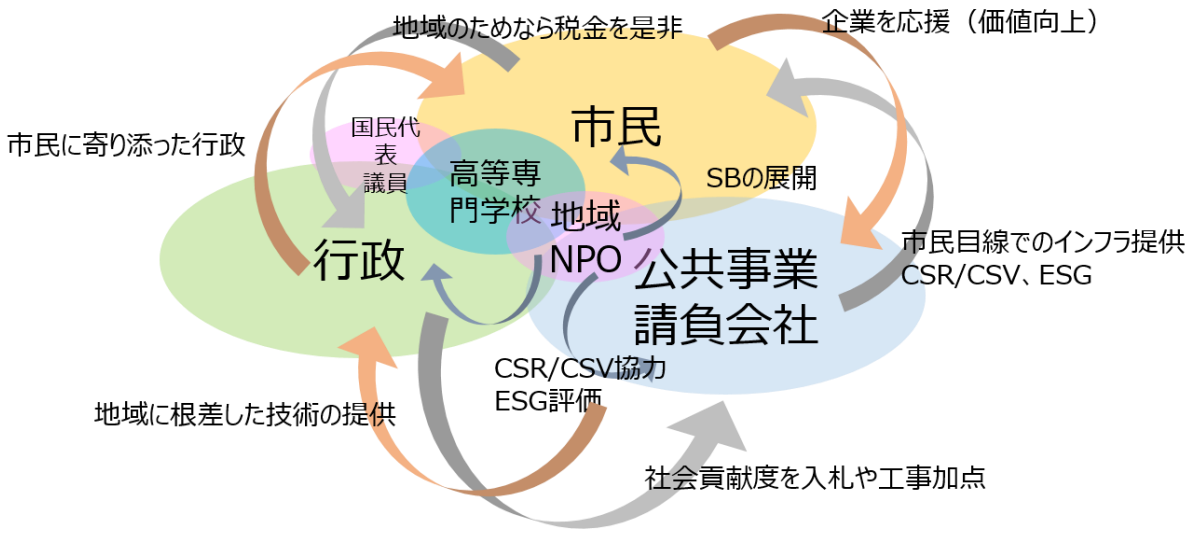
## 99 代土木学会山本会長と１０８代家田会長のご挨拶のキーポイント

◆土木工学は市民工学である
◆土木と市民社会を意識して繋ぐ
◆物質的な豊かさと精神的な豊かさ
■之を楽しむ者に如かず
■ふざけることができる人は、文化を生み出すことができる

## 市民協働に繋がる仕組み

下図は、私がイメージする公共インフラを支えるための産官学民の関わりを表す理想の姿です。

現在の関わりは半時計回りで推移するグレーの矢印となります。市民から集めた税金を市民の意見を必要としない状況で公共事業として企業へ発注する。作られた公共インフラは当たり前のように市民に使われるのだが、そこにはあって当たり前なので自分のモノとしての感覚は当然薄くなります。




そこで時計回りで示すオレンジの矢印を入れ込むと、市民が公共インフラに対する感情が変化するのではと考えております。すなわち、集められた税金は市民の意見を取り入れた計画から始まり、企業は地域に必要とされる公共インフラを作り出し、企業の社会的な役割が増加するため企業価値が生まれる。行政は市民に寄り添った公共インフラを整備できるため、地域に根ざす市民が増加する。地域社会の価値が上がれば、市民はその地域を求めてやってくる。まさに産官民が対等に、より良い社会を形成する「三方よし」が生まれます。当然、学や市民団体は、それらをつなぎ、気運を高める役割であろうと思います。

## インフラマネジメントテクノロジーコンテストの旗印

昨年度から始まった、インフラマネジメントテクノロジーコンテスト（以下インフラテクコン）は、まさに地域に根ざす高等専門学校（以下高専）が産官民のハブとなることで、より良い姿の地域社会を生み出すことが可能となると考えます。地元地域を大事に考える学生が、インフラの現状の課題を調べ、その課題を効果的に解決する体制を学科、学年の横断チームで整え、様々な知見で解決アイデアを模索します。これらのアイデアはアイデアでは終わらず、産を担う企業と共に具現化し、地域行政と実装に向け動き出していく。高専インフラテクコンは、コンテストを通して地域共生社会（地域コミュニティ）が形成されていくことを目指して活動を進めております。

まさに、土木工学は市民工学で両者ともにシビルエンジニアリング、人が生活するうえで欠かすことができない社会基盤であり、インフラテクコンは、それらを意識して繋ぐためのツールの一つであると思っております。さらにボランティアで活動を進め継続するには、徹底して楽しむこと。関わる人が楽しみながら人の輪を広げ、インフラマネジメントやメンテナンスの今後のムーブメントとなるよう期待しております。

## 地域市民団体との協働

さらに高専インフラテクコンは、地域に根ざす市民団体が、高専チームの技術的なメンターとなることで、上段にも述べた、技術支援、技術者育成、地域活性化支援に繋がるのではと考えております。

社会生活をする上で、利便性や効率化のためにデジタル化がかなりのスピードで浸透してきていますが、反面、人の関わりがそれらによって希薄となってきたのではと感じます。

土木工学は市民工学であるように、デジタルだけでは表現できない、人と人のつながりが存在します。楽しみながら活動をしている市民団体と共により良い社会が形成されていくことを願っております。